001-BACK GROUND

北海道札幌市。130年の歴史の中で急速に発展してきたこの都市は、グリッドという構造に大きく依存し、均質な空間を大量に生産することを余儀なくされてきた。今後人口が減少していく中で、時代を超えてマチが魅力を持ち続けていくためには、その都市構造レベルから考えていく必要がある。

01.パブリックスペース

都市の中でのパブリックスペースを言及する。札幌では、どの場所にも低密公園等が計画的に配置されてはいるものの、これらはある高次な質をもった「にぎわい」を生むまでに至っていない。都市の中の唯一に位置するパブリックスペースとなる大通公園があげられるが、空間としては周辺とは隔絶しており、単調と見られるような広場となっており、ポテンシャルに乏しい。密度の高い都市中心部でもっとも、パブリックスペースが機能されるべきである。

02.ストリート

グリッドで整然とつくられたこの街の街区割、均等に分けられた今回は、大通公園、オーロラ通等のいくつかの例外を除いて、多くは都市の骨格をなしている。小路よりも狭いものが多くあるが、これは街区の基本的な単位となっており、歩けばつくられた街並みが個性あふれ、魅力ある通りを演出する。

03.コンセプトメイキング

以上より、この札幌という都市の中心部において、豊かな外部空間、憩いを楽しめるような公共空間に乏しいことが伺える。都市の魅力を高めることができるようなパブリックスペース、ストリートを創ること、これが大きな課題として、プロジェクトのグランドコンセプトとして掲げ置く。

001-04-SITE

計画地／北海道札幌市、北海道大学 南門を含む街区

計画敷地は北海道大学の南門と都市の接点にあたるが、南門は閉ざされ、道中へと続く軸も断れてしまった。感じるものとしてポテンシャルを持った北海道大学ではあるが、現の南北という物理的な境界に阻まれ、広く自分たちの人々が学びあう公共空間としての役割をこの地域に乏しい。周辺には多種多様な専門学校等が数多く存在するため、大学と隣接するという環境から文化的な機能を誘致していくような提案がなされ、通りに新たな活性化をもたらすようなプロセスであるべきであると考える。

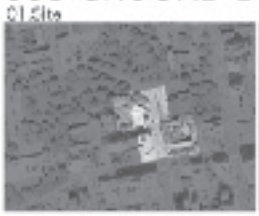
002-CONCEPT

計画地にはかつて大学と都市を結んでいた重要な軸があったが、それとともに人々の記憶からは忘れ去られてしまった。この北大と都市との接点に置いて、都市へと向けた新たな顔となる門を、再生する。これは境界性を際立たせるような一般的な門ではなく、二つの領域を繋ぎ結び合わせる門である。また、この門は場所をくぐる、といった行為が行われる点として存在するのではなく、ある1エリアを持った建築化された門として形成される。

この地における建築は、1.時代を超えて長期的に残っていくべき要素として大学側の「地」の要素を引き込み(中央部Scenarの形成)、2.デザインされた地に対し、それを貫通し第二の地(loc)を形成、同時に都市側の構成的要素を引き込む。3.グリッドの内部に引き込まれた都市と大学との接点を矩形より歪ませながら建築化していくことにより、4.ランドスケープと一体化した建築が、キャンパスイノベーションセンターという機能を保持しながら、都市の一に魅力あるパブリックスペースとしておかれていくこととなる。

003-GROUND DESIGN

01.Site



02.Analysis & Direction

03.Lines

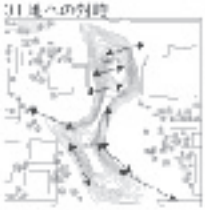
04.Edge

05.Zone

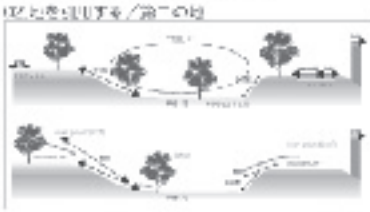
06.Center

004-ARCHITECTURE DESIGN

01.地への到着



02.とどまり出する／通りの中



03.環境の決定

04.解体と再構成

05.空間構成

005-PROGRAM

06.プログラムの配置